

## 第122回 岡山外科会

日時：平成5年10月31日（日）9時30分より

場所：高梁市 高梁総合文化会館2階レクチャールーム

会長：島田彦造

### 1. 画像上髄膜腫に類似の所見を呈した乳癌硬膜転移例

岡山旭東病院脳神経外科 真壁哲夫 西野繁樹 佐藤健吾  
吉岡純二 土井章弘  
放射線科 入沢実

今回我々は画像上、髄膜腫類似の所見を呈した乳癌の硬膜転移の1例を経験した。症例は55歳女性。主訴は左眼球の奥の痛み。既往歴として昭和63年乳癌に対し拡大根治術を施行されている。退院後経過は良好であったが平成4年8月左目奥の痛みが出現。CTで脳腫瘍を指摘され当科紹介。画像上髄膜腫と思われたが、病理診断では乳癌の硬膜転移であった。この症例で

認められ通常の髄膜腫では稀な所見は、単純CTで isodensity を呈したこと、MRI 増強 T1 強調画像で均一な増強効果を示さなかったこと、脳皮質の圧迫像がはっきりしない部分が認められたこと。これらの所見の相異は髄膜腫と孤立性の転移性硬膜腫瘍の鑑別点の一助になりうるかと考えられた。

### 2. 中大脳動脈狭窄に合併したレンズ核線条体動脈瘤の1例

国立岡山病院脳神経外科 難波洋一郎 溝淵雅之 柳生康徳

脳室内出血で発症した反対側中大脳動脈起始部狭窄とその周囲のモヤモヤ様血管およびレンズ核線条体動脈瘤を合併した1例を報告した。動脈瘤は側脳室外側壁に存在し病理組織学的に

は仮性動脈瘤であった。本動脈瘤の発生要因としてモヤモヤ病における末梢部動脈瘤と同様に血行力学的負荷の関与が示唆された。

### 3. 石灰化慢性硬膜下血腫の2症例

水島中央病院脳神経外科 秋岡達郎 東久登  
岡山大学脳神経外科 浅利正二 大本堯史

症例1) 73歳女、主訴痙攣、意識障害、既往歴に3年前に慢性硬膜下血腫の穿頭・洗浄術。初診時、頭部単純写にて石灰化内膜、CTで凸状の高吸収域を認め開頭術により粘土状の血腫

を摘出した。標本は線維組織と石灰化した血腫であった。

症例2) 82歳女、主訴頭痛。既往歴に2年前に慢性硬膜下血腫の穿頭術。CTにて左前頭部

に内側石灰化を伴う mixed density area が認められ、穿頭により、おから状の血腫を可及的

に摘出、いずれの症例も術後経過良好であった。

#### 4. Brachytherapy が有用と考えられた転移性脳腫瘍の2症例

岡山大学脳神経外科 芦立 久 東 久登 松本 健五  
古田 知久 大本 堯史

転移性脳腫瘍の治療は手術と放射線療法の併用療法が有用とされているが、手術困難な症例も多く、放射線療法後再び増大する腫瘍に対しては治療選択は限られている。

我々は以前より悪性グリオーマに対して<sup>192</sup>Ir

を使用した密封小線源療法 (Brachytherapy) を行ってきた。

今回、転移性脳腫瘍2症例に対し brachytherapy を施行し良好な結果を得たので報告した。

#### 5. 15年間にわたり頭頸部に局所再発をくりかえしている原発不明の癌の1例

岡山市立市民病院脳神経外科 原田 泰弘 村上 昌穂  
臨床検査科病理 村尾 烈

症例、81歳男性。1978年、他院にて右頸部皮下腫瘍の摘出手術をうけ、1986年、同部に最初の再発を認め再手術を受けた。以後、局所再発を繰り返し、1993年9月、第10回目の手術を行った。腫瘍は側頭部を破壊し、中耳、前庭に及

び、組織学的には、好酸性の胞体を有し、核は円形で、粘液にとんだ基質をみとめ、初回手術標本と変わらない。しかし、今回は電顕にて多数のミトコンドリアがみられ、原発不明の oncocyoma と診断された。

#### 6. 左心補助装置 (LVAD) により救命し得た Jatene 手術症例

岡山大学麻酔・蘇生科 西山 成 金城 実 太田 吉夫  
平川 方久

近年、補助循環装置の発達により重度左心不全患者の救命が可能になってきたが、その侵襲が大きいこともあり、3ヶ月未満の乳児例での成功例はほとんど見られない。

今回我々は、生後2ヶ月の完全大血管転移症

に対する Jatene 手術後の重度左心不全に対して左室補助循環装置を使用し救命し得た。乳児における重度左心不全に対する左室補助循環装置の使用が左室機能のトレーニングとして働き、有用であることが示された。

#### 7. 軸椎歯突起骨折に対する螺子固定法の経験

水島第一病院整形外科 甲 康成  
岡山大学整形外科 浅原 弘嗣 中原進之介  
光生病院整形外科 佐藤 徹

従来より軸椎歯突起骨折の治療方針には異論

が多かった。主流である保存的療法では長期間

にわたる外固定が必要であり、後方固定法では頸部の回旋障害を生じる。我々は本骨折に対して、中西らにより考案された螺子固定法を3例におこなった。本法は頸椎の可動域制限をおこ

さないで解剖学的整復と確実な固定力を得ることができ、早期よりカラー固定にて離床可能で患者の負担の少ない、優れた方法である。

## 8. 胸鎖関節後方脱臼骨折の1例

岡山済生会総合病院整形外科 中 後 貴 江 吉 村 一 穂 水 田 潔  
守 都 義 明  
岡山大学整形外科 橋 詰 博 行

鎖骨内側骨端離開を伴う胸鎖関節後方脱臼の稀な1例を報告した。症例：17歳男性。柔道の背負い投げをかけようとして左肩より落ちて受傷。左胸鎖関節部の疼痛のため翌日当科を受診した。同部位の腫脹および圧痛、左肩関節の可

動域制限があり、CT像にて鎖骨内側端の胸骨後方への転位を認め、観血的整復術施行。術中所見にて Salter-Harris I 型の鎖骨内側骨端離開を伴う胸鎖関節後方脱臼と診断した。

## 9. ハーバートスクリューの使用経験

岡山市民病院整形外科 鈴木 章 夫 濱 浪 一 則 川 上 和 秀  
鳥 越 保 之 渡 辺 唯 志

平成3年11月から平成5年10月までにハーバートスクリューを使用し治療した15症例15骨折のうち術後経過期間の短い3症例を除いた12症例で良好な骨癒合を得た。また6.5mm ラージハーバートスクリューと AO 16mm-thread ラージキ

ャンセラースクリューの引き抜き強度テストを実施し、両者の間に有意差を認めなかった。骨癒合を得た3症例を供覧するとともに、引き抜き強度テストの結果を報告し考察する。

## 10. 鎖骨遠位端骨折の治療法

岡山大学整形外科 坂田 賢一郎 花 川 志 郎 井 上 一  
光生病院整形外科 佐 藤 徹

Neer type 2 の鎖骨遠位端骨折は保存的治療では整復、骨癒合が困難で、観血的整復内固定術を必要とする。固定にはキルシュナー鋼線を鎖骨遠位端より刺入する方法が一般的であるが、

この方法では、損傷を受けた烏口鎖骨靭帯の修復は行っておらず、我々は Zuggurtung 法による骨折部の整復固定に加えて、テフロンによる烏口鎖骨靭帯の再建を行っている。

## 11. 骨形成不全症における外傷性多発性骨折の1例

岡山赤十字病院整形外科 寺 元 秀 文 小 野 勝 之 那 須 正 義  
山 根 孝 志 武 智 宏 介 藤 井 基 晴

稀な青年期 I—A 型骨形成不全症の外傷性多

発性骨折の1例を経験したので報告した。本疾

患では思春期以降骨折の頻度は低下するといわれている。しかし我々の経験したこの症例では18歳、男性であるにもかかわらず交通事故で1

度に8ヶ所もの骨折を生じた。我々は長管骨折に対し積極的に内固定術を施行し後療法、看護管理において有益であった。

## 12. 食道神経鞘腫の1例

川崎医科大学胸部心臓血管外科 石田 敦久 正木 久男 田淵 篤  
稲田 洋 吉田 浩 福広 吉晃  
土光 荘六 藤原 巍 勝村 達喜

我々は極めて稀な食道神経鞘腫の1例を経験したので報告する。症例は66歳女性で、症状はなく、胸部X線写真で異状陰影を指摘され、精査の結果、後縦隔腫瘍の診断で手術を施行したところ、食道壁筋層より発生した腫瘍であった。

病理組織学的に食道平滑筋腫との鑑別が困難であり、免疫組織化学的検査を行い、S-100蛋白に陽性であり、食道神経鞘腫と診断した。悪性化傾向があるとの報告もあり、今後の経過観察が必要である。

## 13. 内視鏡的食道粘膜切除術 (EMR) 10例の検討

岡山大学第一外科 猶本 良夫 上川 康明 羽井 佐実  
ルイス・フェルナンド・モレイラ 八木 孝仁  
岡林 孝弘 田中 紀章 折田 薫三

これまでに当教室で経験した内視鏡的食道粘膜切除術10例について検討を行った。男性8例、女性2例、平均64歳で病巣は1cmが最も多かった。病巣の大きさは平均15mmであった。これらに対してEEMRチューブまたは先端キャップを用いて粘膜切除を行った。病理組織結果では

8病巣がsquamous cell carcinoma, 6病巣がhigh-grade dysplasiaであった。carcinomaのうち5病巣がep, 3病巣がmmであった。すべての病巣がlymphovascular invasion (-)で断端(-)であった。10例において重篤な合併症を認めなかった。

## 14. Desmoid tumor の治療経験

川崎医科大学消化器外科 菊川 大樹 今井 博之 笠井 裕  
藤森 恭孝 吉田 和弘 山本 康久  
角田 司

家族性大腸腺腫症に発生した腹部デスマイド腫瘍の3例を経験した。2例は大腸全摘後3年及び1年で発症しており、1例は大腸腺腫症の診断時、既に下腹部の腫瘍があった。腫瘍はいずれも、最大径10cmをこえる充実性腫瘍であっ

た。2例には外科的切除が行われたが、どちらも腸間膜内に広範に存在したため、完全には摘出できなかった。抗エストロゲン製剤を3例全てに投与した。1例は再発のために死亡した。

## 15. 総肺静脈還流異常症手術例の検討

岡山大学心臓血管外科	三谷英信	菅原英次	青木 淳
	森本 徹	新井 禎彦	山口 裕巳
	久持 邦和	甲元 拓志	高垣 昌巳
	紀 幸一	佐野 俊二	

新生児4例を含む総肺静脈還流異常症8例を経験し、肺静脈幹の低形成と左肺血管腫を伴っていた1例を失った。肺静脈閉塞を伴う症例(8例中5例)は、術前状態が不良で、気管内挿管、

ドーパミン、PGE 1の投与を必要としていたが、非侵襲的な心エコー検査により診断し、早期に外科的治療を行なう(入院から手術まで平均5.5時間)ことで良好な成績を得ることが出来た。

## 16. Bentall 術後の弓部胸部下行大動脈瘤に施行した人工血管置換術の1治療例

心臓病センター榊原病院心臓血管外科	難波 宏文	畑 隆 登	津島 義正
	松本 三明	坂本 貴彦	濱中 荘平
	藤原恒太郎	谷口 堯	

動脈硬化性の遠位弓部大動脈瘤に対する手術成績は、現在でもまだ十分満足のいける成績は出されていない。今回我々は、Bentall手術後遠隔期で、遠位弓部大動脈瘤と下行胸部大動脈瘤を合併した52歳女性に対して、遠位弓部下行大

動脈人工血管置換術と左総頸動脈、左椎骨動脈、左鎖骨下動脈の3枝動脈再建術を一期的に施行し、良好な結果を得られたので、術前、術中、術後の問題点を含め、報告する。

## 17. 血行再建により患肢を温存した悪性軟部腫瘍手術例の検討

岡山大学整形外科	横井 正	川井 章	橋詰 博行
	井上 一		
心臓血管外科	内田 發三	佐野 俊二	

切除縁の概念を取り入れた広範切除術の普及に伴い、悪性軟部腫瘍の根治的治療は切離断術から患肢温存が広く行われるようになってきた。今回我々は心臓血管外科の協力を得て血行再建により患肢を温存した悪性軟部腫瘍手術例を経

験した。血行再建を前提として手術計画を立てることにより安全な切除縁を設定し局所再発の可能性の低い手術を行うことが出来るようになったが、術後浮腫、感染など解決すべき問題点も明らかになってきた。

## 18. 下肢静脈瘤に対する硬化療法の経験

岡山労災病院外科 間野正之 野崎功雄 福田和馬  
原田英樹 石原弘道

下肢静脈瘤に対する硬化療法は簡単で患者に対する侵襲が少ない。過去1年間に女性18例(28肢)、男性7例(9肢)にポリドカノール(0.5-3%)を用いて硬化療法を施行した。静脈瘤の型は saphena タイプが女性13例(72%)、男

性3例(43%)と多く次に segment であった。高位結紮、静脈瘤摘除、穿通枝結紮等なんらかの手術併用例は20例(31肢)であった。静脈瘤が殆ど消失しなかった2例を除き、手術創を縮小でき、結果は良好であった。

## 19. 肺動脈形成術と気管支形成術を併用した肺葉切除肺癌症例の検討

岡山大学第二外科 岡部和倫 青江基 森山重治  
安藤陽夫 清水信義

肺動脈と気管支形成術を併用した肺葉切除肺癌症例15例を検討した。stage Iが1例のみなので、stage Iを除いて生存率を比較検討した。本術式の3生率：53.8%、5生率：9.0%で、形成術を施行していない肺葉切除術の3生率：36.7%、5生率：26.9%であり、有意差を認め

なかった。手術による%VCの変動を検討した。本術式の術前：88%、術後：61%で、肺全摘術の術前：92%、術後：53%であった。本術式は、肺機能温存と治療成績の点から有用な術式である。

## 20. 切除不能肺癌に対して開胸気管支動脈カニューレーションによる動注化療の経験

岡山大学第一外科 岡林孝弘 八木孝仁 井上文之  
上川康明 田中紀章 折田薫三

切除予定で開胸し、切除不能であった肺癌2症例に対して、気管支動脈との共通管から分岐する第3肋間動脈よりカニューレーションを行い、動注化学療法を行った。

2例とも腫瘍縮小効果を認めたが、1例では、

無気肺の改善とともに術前よりのMRSAが再出現し、また動注続行不可となり、死亡した。他の1例では、リザーバーからの間歇的動注化療を継続中で、QOLも良好である。

## 21. 手術と塞栓療法を併用した多発性肺動静脈瘻の1例

岡山大学第二外科 佃和憲 青江基 森山重治  
安藤陽夫 清水信義

肺動静脈瘻は、肺動脈と肺静脈の異常短絡を来す血管奇形である。治療法として、外科的切

除に代り経血管的塞栓療法が最近普及してきた。塞栓療法は侵襲が最小限に抑えられるため、特

に両側多発例や再発例に良い適応となる。  
今回我々は、多発性肺動静脈瘻に対し一方は

開胸下瘻摘出術を、他方には塞栓療法を施行し  
治癒した症例を経験したので報告した。

## 22. 胸腔鏡下手術により摘出しえた心膜囊腫の1例

津山中央病院外科 瀬下 賢 伴 秀利 多胡卓治  
官島孝直 長江聡一 黒瀬通弘  
徳田直彦

症例は73歳女性、胸部異常陰影を指摘され来院。自覚症状はなし。胸部 X 線写真にて右肺野右心影に重なる境界明瞭な腫瘤陰影を認めた。CT, 及びエコーでは水に近い濃度の囊胞性腫瘍

の陰影を呈していた。以上より心膜囊腫の診断にて胸腔鏡下の手術を施行した。腫瘍は完全に摘出でき、術後経過も疼痛が少なく良好であった。

## 23. 動注門注併用療法が有効であった肝細胞癌の1例

岡山大学第二外科 石崎雅浩 平井俊一 白杵尚志  
小松原正吉 清水信義

切除不能肝癌に対して動注門注併用療法を行い、著効した1例を経験したので報告する。患者は、両葉に多数の肝腫瘤を有す50歳の男性である。造影検査で門脈浸潤もあり切除不能肝癌と診断された。TAEのみでは、その効果は悲観

的であったため、動注門注併用療法を行った。その結果、3カ月後には約70%の腫瘍縮小率を得られ、1年後の現在も生存している。動注門注併用療法は、切除不能肝癌に有効な治療法の一つと考えられた。

## 24. 膵臓癌に対する集学的治療

岡山大学第一外科 津下 宏 折田泰造 森 雅信  
田中紀章 折田薫三  
同医療短期大学部 三村 久

最近18年間に経験した107例の開腹手術を受けた膵頭部癌症例についてみると、拡大手術によって治癒切除を得ることは生存率向上に重要で

あったが、治癒切除不可能例では化学・免疫・放射線療法を組み合わせることによって比較的長期間の生存を得る例もあった。

## 25. 当院における腹腔鏡下胆嚢摘出術の検討

おおもと病院 村上茂樹 石賀信史 庄 達夫  
石原清宏 酒井邦彦 岩藤真治  
山本泰久

1991年12月に第1例を行ってより1993年10月第3週末までに176例に施行した。当院での腹腔

鏡下胆嚢摘出術の現況と工夫さらに困難症例につき報告する。手術適応は、胆嚢内結石、ポリ

一ブ、膵筋症の胆嚢内病変および急性胆管結石 合併症例である。

## 26. 胆嚢管癌の1例

川崎医科大学消化器外科 玉田 勉 牟礼 勉 岩本 末治  
忠岡 好之 木元 正利 角田 司

比較的まれな胆嚢管癌の症例を経験した。  
患者は、58歳男性で主訴は発熱、上腹部痛黄疸。PTCDからの造影、CT、血管造影にて胆嚢管癌と術前診断し開腹、胆嚢摘出術、肝外胆管切除、2群までのリンパ節郭清を施行した。摘出

標本の病理組織学検査にて低分化型管状腺癌で胆嚢管から発生し総胆管を漿膜側から圧排する様に浸潤がみられ、胆嚢管原発と診断した。本邦報告例の診断、治療方針につき検討を加えた。

## 27. 慢性骨髄性白血病を合併した胃癌の1例

国立岡山病院外科 野村 修一 松本 英男 鷺尾 一浩  
小林 一泰 板野 秀樹 藤岡 正浩  
平井 隆二 白井 由行 田中 信一郎  
佐々木 澄治

症例は69歳女性で、慢性骨髄性白血病と同時に進行胃癌が発見された。Hydroxyureaによる抗白血病治療の後、胃全摘摘脾をおこなった。

合併症なく経過した。慢性骨髄性白血病の治療及び予後からみて、その慢性期においては胃癌手術の適応があると考えられる。

## 28. 胃形質細胞腫の2症例

岡山大学第一外科 松野 剛 合地 明 稲垣 優  
猶本 良夫 上川 康明 田中 紀章  
折田 薫 三  
渡辺病院外科 遠藤 徹

本邦にて約40例しか報告されていない極めて稀な腫外性胃形質細胞腫を当科において2症例経験したので報告した。症例1は61歳女性で胃の多発性隆起性病変で、そのポリペクによりIgM/ $\kappa$ タイプの胃形質細胞腫と診断された。胃全摘を

施行したところ、深達度mであった。症例2は71歳男性で、大腸癌の手術後フォロー中に偶然発見された胃粘膜下腫瘍性病変で、局所切除を行ったところ深達度sm、IgG/ $\lambda$ タイプの胃形質細胞腫であった。

## 29. 下血をきたしたメッケル憩室の1例

川崎医科大学附属川崎病院外科 佐藤 公治 小山 昱甫 光野 正人  
 青山 裕 安田 俊子 溝上 宏明  
 吉田 一典 土持 茂之 木曾 光則  
 川崎 祐徳 佐野 開三

症例は7歳男児。腹痛・嘔吐・下血を主訴に入院。便潜血陽性、上部消化管X線検査では異常所見は認めず、 $^{99m}\text{Tc}$ シンチグラフィーを施行したところ、異常集積を認めた。開腹にて回腸末端より口側70cmにメッケル憩室を認め、さ

らに憩室内には嚢胞がみられた。組織学的検索で憩室内には胃粘膜で形成された小憩室があり、憩室内憩室の形を呈していた。本例は、その憩室内憩室の入口部付近に発生した潰瘍が出血源となった1例であった。